緊急支援

【写真提供】岩手県立高田病院　上野正博様

まず進めたのは
過去から学んだ「4つ」のこと

過去の災害から学んだ
「情報支援」「現地の底力を信じて応援すること」
「心のケア」「希望の象徴をともに守ること」の大切さ。
私たちは、この4つに対するアプローチを、
震災発生当初からすすめました。

1 情報支援

「全ての活動は災害時の情報のために」。これは設立以来掲げているスローガンです。これまでの災害救援活動時において「何が起きているのかわからない」「家族の安否を知りたい」といった情報受発信環境が必要とされている場面に幾度となく遭遇してきました。だからこそ震災発生当初から、実践により培った成果を、被災した方々はもちろんさまざまな組織にご利用いただき情報支援しました。

衛星「きずな(WINDS)」を利用して大船渡市役所にて情報支援

宇宙航空研究開発機構『JAXA』と愛知ネットとは、これまでに衛星「きずな(WINDS)」を利用した災害時における情報支援の実証実験を行ってきました。震災直前には、新潟県佐渡市における実証実験を予定しており、JAXAが岩手県災害対策本部から応援要請を受けたこともあり、大船渡市での活動を開始しました。

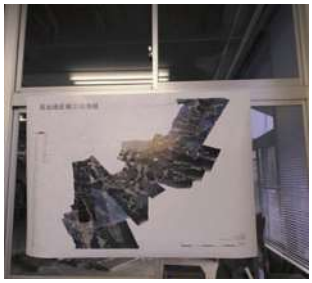
「e防災マップシステム」で気仙地区での被災状況の集約

これまでに、防災科学技術研究所『NIED』と愛知ネットとは、NIEDが開発した「eコミプラットフォーム」や「e防災マップシステム」等を用いて、愛知県における地域防災力高度化のための事業をすすめました。NIEDのメンバーの方の中に、大船渡市出身の方がいらっしゃったご縁があり、「e防災マップシステム」を利用して気仙地区の被災状況や、情報の集約を行いました。

岩手県災害対策本部と釜石の現地対策本部間でのテレビ会議の模様(県庁で撮影)

現地対策本部(釜石)に設置された可搬型USATの外観写真(アンテナ径45cm)

釜石の現地対策本部の1階ロビーでインターネット利用している住民の模様



防災マップシステムを利用した被災地状況の把握

JAXAの岩手県における「きずな」通信衛星による支援活動について

独立行政法人　宇宙航空研究開発機構
衛星利用推進センター　主幹開発員

冨井直弥さん

「岩手県災害対策本部の要望とJAXAの支援活動内容」

JAXAは、岩手県災害対策本部(本部)から、本部と現地災害対策本部(現地)の釜石や大船渡の沿岸広域振興局に衛星電話とインターネット回線の提供支援を要請された。

本部担当者との会話で、本部と現地間での情報共有に課題があることを知った。テレビ会議の導入で本部と現地の関係者により、いちどきに情報共有ができ、課題解決できることを悟った。「きずな」通信衛星は、商用通信衛星に比較し小型のアンテナで、高速回線が提供できる通信能力を有している。機材輸送や要員の現地入り手段を持たないJAXAは、それらの確保に手間取り、震災後約1週間を経て現地入りした。テレビ会議導入で、情報共有の課題解決が図られ、さらに現地の1階ロビーで、被災者向けにパソコンと「きずな」によるインターネット回線を提供した。

それまでの被災者安否情報の確認は、1階ロビーの台帳によっていたが、「きずな」回線の導入でインターネット検索キーで即時に調べることができる。その他、メールのやり取りやWebで各種情報などの閲覧などに利用された。国や自治体の派遣チームにも利用されていた。「きずな」通信衛星による愛知ネットとの災害想定訓練の活動成果を、そのまま実災害に適用できただけではなく、被災自治体や被災者に役立っていることを実感できた。

「今後の活動の展望」

来るべき災害に備えて引き続き、愛知ネットなどとJAXAは訓練を実施していくとともに、今回の教訓を踏まえ、将来の衛星通信システムの研究開発に取り組む。また、愛知ネット天野理事長の橋渡しで、岩手県大船渡市役所への「きく8号」通信衛星による通信回線提供支援を実施するなど、愛知ネットにはお世話になった。

最後に、被災で亡くなった方々のご冥福をお祈りするとともに、避難所生活されている被災者の方々の生活環境が一日も早く取り戻せること、未来を創る子どもたちが元気よく成長していけることを切に願っている。

公民協働による被災地による被災地のための情報支援活動を

独立行政法人防災科学技術研究所主任研究員
兼一般社団法人東日本大震災
デジタルアーカイブス支援センター
長坂俊成さん

開発中の「eコミュニティプラットフォーム」(オープンソース・無償公開)を活用し、公民協働により被災地の情報支援に取り組んできました。災害ボランティアセンターの運営や被災自治体の罹災証明書発行、瓦礫撤去管理、仮設住宅等の要援護者見守りなどの活動を支援するSaaSを提供しています。また「311まるごとアーカイブス」(一般社団法人東日本大震災デジタルアーカイブス支援センター)と協働して、被災地による被災地のためのアーカイブスの支援活動に注力しています。被災前の地域の映像もアーカイブし、地域のアイデンティティや思い出を再生し心の復興に貢献できればと思います。また、アーカイブスを活用した電子教材や復興ツーリズムのためのデジタルフィールドミュージアムのためのクラウドシステムを開発し、愛知ネットにもご支援いただき、アーカイブスを活用した被災地の若者の社会起業を支援していきたいと思います。

2 現地団体との連携・支援

私たちは、愛知県内各地の市民活動センターの運営を、指定管理者として受託しています。市民活動拠点で平時から活動をサポートさせてもらうことで、防災力を高めるお手伝いができると同時に、災害時においては復旧・復興力増進に寄与できると考えるからです。震災によって大切な方やモノをなくされ、それでも立ち上がり、わがまちの復旧や復興への想いを胸に活動する皆さん。私たちは現地の底力を信じ、応援させていただきました。

経験を活かして、一致団結して、つながりのある団体と協力しあって活動を展開

『気仙市民復興連絡会』や、各市民活動団体のサポートなど、さまざまな団体との連携・支援を通して、多岐にわたる活動を実施しました。

『NPO法人 夢ネット大船渡』(理事長が気仙市民復興連絡会の会長でもある)は、被災前から気仙地区の中間支援団体として、活動してきました。「一人でも多くの方にお返ししたい」との想いで、写真の収集と引き渡しを行いました。愛知ネットは、夢ネットに対して、愛知県の団体を紹介。静岡県をはじめ、全国のチカラをかりながら活動されました。

『NPO法人 けせん・まちの保健室』は、岩手県立福祉の里センターにて、サポートが必要な方が利用する福祉避難所を運営しました。また、血圧測定や健康相談も実施。これは震災前から行っていた活動で、福祉施設からの出張依頼にも対応しました。また、仮設住宅入居の方への支援活動では、民生委員や愛知ネット臨床心理士チームと協働して進めました。

『音声訳 オープンハート』は、視覚障がいの方のために「広報おおふなと」をカセットテープに録音して届ける活動を展開しました。会長宅に寄せられた支援物資をおすそ分けする「青空市」も複数回行いました。また震災前からつながりのあった『美杉会大船渡』と協働しながら、情報の点字訳活動もしました。愛知ネットは、青空市のお手伝いや、ご紹介をうけたイベントで浜のミサンガ「環」を販売しました。

『もさばロハス倶楽部』と『椿の里 大船渡ガイドの会』とは、双方に所属する会員さんがいたことから、炊き出し等連携した活動を実施。共に気仙地区内で多くの会員さんがいることから、さまざまなニーズを収集。炊き出し実施の運びとなりました。愛知ネットは、さまざまな組織と連携してそのお手伝いをしました。両団体と炊き出しで連携したコープあいちとは、愛知から寄せられたタオルの配布、被災地支援ツアーのガイド活動など展開しました。

『のびのび子育てサポーター・スマイル』は日頃から育児支援をしており、震災により利用していた会場が避難所となったことを受け、屋外でのイベントに切り替えて、子育て支援活動を継続しました。愛知ネットは、その応援のために、当日イベントのお手伝いや愛フェス2011へご招待する等して、資金調達と広報協力とに協力しました。

『NPO法人 ITネットワーク陸前高田』は、2011年4月末の時点でメンバーの安否確認ができていない状況でした。気仙市民復興連絡会の協力を得て、メンバーの安否確認を進め、会長を中心に活動を再スタートしました。

『読書ボランティア おはなしころりん』は、避難所で3月25日から読み聞かせ活動を再開。助成金を利用して絵本作家を招いたイベントも実施しました。

個人宅へ避難されている方へ炊き出しを持っていく

気仙市民復興連絡会事務所内

写真の収集

写真の引き渡し

気仙市民復興連絡会とは…

気仙地区(大船渡市・陸前高田市・住田町)のNPOや市民活動団体の8団体が集まり、2011年4月3日に結成された連絡会です。所属する各団体は、震災前に行っていた活動を継続したり、震災により発生したニーズに対する活動を行います。それら活動内容を連絡会で共有し、必要なサポートを団体相互に行います。愛知ネットはこの連絡会に参画。所属団体の活動サポートや、「復興ニュース」発行をはじめとした広報活動、経理、助成金申請のアドバイスなどによる、“必要な部分を必要なだけ”お手伝いしました。連絡会は2012年4月に発展的解散をしましたが、現在も各団体の活動は継続しています。

食を支援した炊き出しに加え、交流の場となった「お茶会」も実施

2011年4月から8月にかけて、大船渡・陸前高田の両市で、避難所での炊き出しを行いました。デリカフーズ（株）さん、生活協同組合コープあいちさん、大至産業（有）さんから食材提供いただき、被災地の食を支援。さまざまな野菜の入ったカレーうどんや、九州名物のちゃんぽん、愛知名物のひつまぶしは、大好評。調理にあたっては、全国のボランティアの皆さんに活躍いただきました。

炊き出しは避難所で行いましたが、コーヒーや紅茶を飲んでおしゃべりする「お茶っこ」は仮設住宅でも行いました。仮設住宅にお住まいの方同士の交流や、コミュニティづくりを促進するお茶っこは、全国の皆さんからの寄付金を使い購入したお茶会セットを利用して、実施しました。

お茶会の様子

炊き出しを食べる現地の高校生ボランティア

津波が持ってきたもの

元気仙市民復興連絡会会長
NPO法人夢ネット大船渡理事長

岩城恭治さん

津波から5ヵ月後の2011年8月に、陸前高田市内のある被災者から投稿をいただきました。「あの日、津波が持っていったものと持ってきたもの」との題名でした。避難所暮らしの中で「遠くの親戚より近い間柄」や「全国からの支援の温かさ」によって、「普通に暮らしていては気付かなかった何か」を持ってきてもらったとの内容でした。愛知ネットの指導により結成しました「気仙市民復興連絡会」は、まさに気仙地区が気付かなかった「津波が持ってきたもの」でありました。普通に活動していては気付かなかった教訓でありました。愛知ネット支援の最大の効果は、活動拠点の事務所を設置していただいたことです。この事務所を拠点に、気仙地区の市民活動団体が被災者支援活動を学ぶことができたのです。

被災から3年目になる平成25年は、県外支援団体の活動が縮小される時期でもあり、地元市民活動団体の一層の活動が求められる時期と心得て努力します。愛知ネットの今後のご発展を祈念し、気仙地区のNPO関係者を代表してお礼を申し上げ感謝の言葉といたします。

あの時…そして今

NPO法人けせん・
まちの保健室　理事長

畑中幹子さん

私たちの団体は、医療職を退職した看護師、保健師、管理栄養士で組織しています。平成23年3月11日14時46分、あの忌まわしい震災が起こると同時に救護活動を展開しました。ライフラインが断たれた避難所での救護活動は悲惨なものでした。

3月末、愛知ネットが当地に入り「気仙市民復興連絡会」が組織されました。赤崎漁村センター避難所と炊き出し班とのつなぎ役をしました。4月中旬、災害対応型出前保健室を開始しました。血圧測定をしながら被災時の状況を語り、共に涙しました。4月下旬から7月末までは福祉避難所（大船渡市委託）の運営に当たりました。愛知ネットから臨床心理士チームが派遣され一緒に活動することで充実した運営ができたと思っています。

高齢化率の高い被災地では閉じこもりと運動不足が大きな健康課題です。出前保健室、介護予防教室やサロンを3ヶ所で開き、バランス食の提供もしています。3年目の今年は、仮設に残った人、在宅に戻って隣人のいない人など孤独を感じる人が増えるように思われます。地道に訪問し顔の繋がった支援活動が必要と感じています。

気仙のみなさんとのつながりを継続し発展させていきたい

生活協同組合コープあいち
執行役員

牛田清博さん

愛知ネットの天野さんから2011年4月に赤崎町漁村センターへの食器の依頼があり、その後5月から「気仙市民復興連絡会」の炊き出しの材料供給と同行を始めたのが、最初の活動でした。食材のカット野菜は『フレッシュ小野』さんから仕入れ、仙台から住田町農林会館まで運んできました。生協の組合員からいただいたタオル（約17万本）の配布は、炊き出しでは追いつかず、連絡会のみなさんから気仙の方まで協力していただき直接お渡しすることができました。そして「見にきて」の声にツアーを企画し、組合員も200名以上参加し交流をさせていただきました。これからも双方向の交流、気仙の文化の学び、商品や産物・手作り品の利用など、気仙のみなさんとのつながりを更に継続し発展させていきたいと思います。

支援というより、手伝っていただいたり教えていただいたことの方が多いと思います。今後も「新生気仙地区」のために、微力ですが一緒に活動できればと思います。愛知ネットのみなさんには気仙地区との橋渡しをしていただき、本当に助かりました。スタッフ、ボランティアのみなさんありがとうございました。

人々から学んだことを心に刻んで

愛知淑徳大学4年
災害ボランティア

所 里帆さん

震災が起きて間もない頃、岩手県大船渡市でボランティア活動をさせていただきました。最終日は、岐阜の自分の家に帰ることがとても辛かったのを覚えています。私には帰る場所があるけれど、被災地に住んでいる方々は復興に10年はかかると言われている地に住み続けなければいけない。現地で私にもできることはたくさんあったのに、私は元の生活に戻ってしまう。そのギャップを受け入れられなくて苦しかったです。

しかしそれと同時に「被災地から離れていても私たち学生にもできることはあるんだ!」と強く思いました。愛知にも大学にも「東日本のために何かしたい!でも、自分にできることって何だろう?」と悩んでいてなかなか行動に移せない人たちがたくさんいました。私は「愛フェス」をそんな人々の想いを形にするイベントにしたいと思い、活動してきました。「愛フェス」を通して出会った人々から学んだことを心に刻んで、社会人になっても頑張ります。本当にたくさんの経験をさせていただきありがとうございました。

被災地の職人さんに働く意欲を持っていただくために

災害ボランティア

杉浦忠男さん

被災された大工さんは、「家も工場も道具も流されて何もできねぇ」と精神的にも落ち込み、「ボランティアに来たぁ」って大きな顔をしているよそ者を煙たそうにみています。まずは、発電機・電動工具・ハンドツールなど被災地の職人さんに働く意欲を持っていただくために道具を集めようと思いました。先の気仙大工の棟梁に、「中古の道具でよいものではありませんが、使ってください」と届けました。秋に、お礼のさんまが届いたのはうれしかったです。

地元の団体の声に共感し「真のニーズ」を知って支援活動を

愛知ネット　事務局次長　南里 幸

愛知ネットは「気仙市民復興連絡会」をはじめ、現地団体の主体的活動を応援しようというスタイルで、活動しています。ですから、炊き出しやお茶会等の支援を、気仙の皆さんからの「やらなければ」という声をきっかけに始めることができ、うれしかったです。その声に愛知をはじめ、全国のボランティアの方々も共感し活動いただき、さらにうれしく思いました。気仙は強い絆で結ばれていて、気兼ねなくいろいろな話ができます。一方で、いつかは去る人だからこそ、話せることもあります。被災者のみなさんが真に必要としているものに対し、気仙の皆さんと連携し、全世界のさまざまな資源を活用させていただきながらアプローチできたことは、非常にありがたいことでした。今、活動を通じて、気仙の皆さんと愛知をはじめ全国の皆さんがつながり、復興に向けたさまざまな動きがでてきています。時期によって真に必要とされるものは変わります。これからも、冷静な目を持ちながら、温かい心で応援できればと思います。

3 臨床心理士派遣

「心のケア」は、過去の災害発生時においても、重要な支援活動のひとつとして位置づけられてきました。東日本大震災は未曽有の災害・想定外の災害といわれる中で、愛知県臨床心理士会はじめ私たちの呼びかけに共感いただいた全国の臨床心理士の皆さんの活躍により、避難所運営時期から被災した方々の心に寄り添い、心のケア活動を実施しました。

全国の臨床心理士有志による活動

2011年4月3日、愛知県臨床心理士会をはじめ、全国の臨床心理士の皆さんによびかけ、こころのケア活動を開始しました。活動は、行政機関（大船渡市や住田町）、臨床心理組織（岩手県臨床心理士会や岩手県精神保健福祉士協会、岩手動作法学習会等）、全国の医療チーム等さまざまな関係組織と連携および情報共有しながら、進めました。避難所の巡回訪問や、設置したカウンセリングルーム『こころの里』での活動、炊き出しやお茶会の場を利用したケアや、仮設住宅での活動など多岐に渡りました。また支援者の立場でいらっしゃる方（教職関係の方・福祉分野の方・現地ボランティアの方）に対する心のケア活動を行いました。2012年3月31日をもって終結または引き継ぎを行い、活動終了しました。

「心の扉」を開けて
トレーラーハウスでケア
「愛知ネット」1年間の長期支援
笑顔とともに寄贈

6月10日付「東海新報」にて、トレーラーハウスでのケアを紹介

臨床心理士チームによる「コラージュ療法」の様子

こころに寄り添う臨床心理活動

「こころのホッとルーム」で、「ほっ」

岩手県立
気仙光陵支援学校長

三浦祐子さん

未曾有の震災に直面し、児童生徒は猛烈な不安を掲げていました。その不安を和らげるのは教職員の役目。しかし、実はその教職員が非日常の有様に心の拠り所を探し求めていたように思います。

そんなとき、「愛知ネットさん」という救いの神が颯爽と登場し、延期された始業式・入学式前の児童生徒を迎える心構え、私たちの心のケアをねらいとした研修会の開催、計20回のカウンセリングルームの開設・対応をしてくださいました。このカウンセリングルームを私たちは「こころのホッとルーム」と呼び、教職員・保護者・生徒の心の支えになりました。特にも震災で母親を亡くし自宅を流失したHくんにはどれ程心強いカウンセラーさんであったことか。彼の表情が明るくなっていくのがよく分かりました。また、これとは別に不適応行動を呈していた教員への対応もしていただきよい結果を得られています。

木原英里子先生、小泉奈央先生、大崎先生を始め、皆様には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

暖かい心のふれあいに感謝

臨床心理士

石垣明美さん

震災の2ヶ月半後に愛知ネットを通じて心理支援に参加。避難所を巡って、お話し相手やお手伝いをさせていただきました。

昼間は、子どもたちは学校、現役世代は仕事や職探しに出かけて、避難所には高齢な方々がおられました。被災前は、家事などで体を動かしていた方たちも、避難所生活では運動不足になりがちですので、お話ししながら一緒にお散歩をさせていただいたりしました。被災した時だからこそ語られる人生の振り返りの物語には、困難な時でもそれを乗り越えてゆく誇りが感じられました。今でも懐かしく思い出します。中学生の子が「僕たち若者がこの町をもり立てて行かねば、と、運動会の準備をしています」と真剣に語ってくれたことも、人間存在の素晴らしさを教えてくれました。テレビの報道だけを見ていてはわからない、被災地の人たちの一生懸命を感じました。支援する側される側の垣根を越えた、暖かい心のふれあいに感謝しています。ありがとうございました。

支え合うことの大切さを実感

愛知学泉大学　現代マネジメント学部
臨床心理士

大崎園生さん

私は、2011年の5月と10月に、愛知ネット臨床心理士チームの一員として、岩手県大船渡市での支援活動に参加させていただきました。5月はまだ多くの人が避難所で避難生活を送っている一方、仮設住宅への転居がはじまったばかりの時でもありました。避難所をまわり、状況を把握するとともに、被災地における心理的ケアの体制づくりに力を注いでいました。そのなかで、臨床心理士単独でできることは少なく、いかに他の専門職や現地の支援者と協力できるかが、効果的な支援の要諦であることを痛感することになりました。

また被災された方々の生きる姿を目の当たりにし、臨床心理士チームのメンバーや、愛知ネットのスタッフの皆さんと一緒に活動したことで、改めて支え合うことの大切さを教えていただいたと思います。

これからも「こころのケア」継続を

臨床心理士

成田裕子さん

私は、2012年5月と8月に、愛知ネットが行った「こころのケア」活動に臨床心理士として参加させていただきました。避難所巡回では、不眠、体の痛み、家屋や職場を失ったことへの喪失感、将来への不安、などについて話される人が多く、愛知ネットが設置したカウンセリングルーム「こころの里」では、PTSD症状（音や人の声に過敏に反応する、思い出したくなくても震災当日の光景や死体が思い出されてつらい、ひきこもりがちになっている、など）や、家族や知人を亡くした悲しみについて語られる人が多くいらっしゃいました。大規模自然災害によって傷ついたこころの回復には時間がかかります。愛知ネットでは1年間の継続した活動を行いました。しかし、いまだ復興の過程であり、孤立化した方々や社会適応が困難な方などもいらっしゃる中で、これからも2年、3年と国全体で「こころのケア」を継続していかなくてはならないと思います。

微力ながら支援のサポートを

臨床心理士

丸山陽子さん

「避難所の皆さん、お世話になりました。必ずや復興を遂げ、笑顔でまた会いしましょう」。避難所から仮設住宅へ移ることになったご夫婦が、避難所の皆さんに向けて大きな声で仰った言葉です。どこからともなく拍手がおこり、皆でご夫婦の出発を見送りました。

2011年6月、私は震災から3ヶ月後の大船渡市で、臨床心理士チームの一員として活動に携わりました。これはその時の一場面です。限られた時間の中で「心理士として何ができるか?」を自問自答しながら、一期一会になるかもしれない方々のお話を聴かせていただきました。私がお会いできた方はわずかかもしれませんが、その方の思いや困っていることをミーティングの場で伝え、愛知ネットの皆さんと「今どのような支援が必要とされ、求められているのか」を話し合い、微力ながら実行へのサポートをさせていただきました。

「必ずや復興を遂げ、笑顔でまた会いしましょう」、この言葉が本当の意味で実現することを心から願っています。

「自分はひとりだと思わない」こと

愛知ネット　事務局員　勝屋弘文

私たち愛知ネット臨床心理士チームは、2011年4月2日より現地入りし、翌年の3月まで避難所訪問や仮設住宅への訪問面談、トレーラーハウス「こころの里」での心理面接、支援学校への定期訪問などを行ってまいりました。

被災直後の街は行政が機能せず情緒的混乱と情報の錯綜した状態にあり、他地域から来たNPO団体が活動するのは簡単ではない状況でしたが、ここまで活動できたのは市職員の方々、医療チームをはじめとする支援者の方々、そして何より理解を示していただいた被災地の方々のおかげです。誌面を借りて厚くお礼申し上げます。

もうすぐ発災から2年が経とうとしています。辛い時人はつい「自分はひとりだ」と思いがちですが、大切なのはちょっと視点を変えて「自分はひとりだと思わない」ことだと思います。現地での心理支援は2012年3月末をもって終了し、その後は主に愛知県での各種防災講演会やイベント等での東北物産販売という形で支援に関わっています。今後も継続していく予定ですのでご理解ご協力のほどよろしくお願い致します。

4 奇跡の一本松保護対策

景勝地として愛された約7万本の松が育った高田松原において、唯一残った一本松。目にする人々に希望を抱かせる存在であると同時に、震災の恐ろしさを伝える存在だと感じました。一本松を守ることが、気仙地区の方々にとっても防災活動に取り組む私たちにとっても意味のある活動であると考え、保護活動を進めました。

一本松保護のために できることはないか…

陸前高田市の高田松原で、唯一、津波に耐えた「奇跡の一本松」。『財団法人日本緑化センター』が中心となり、保護のための活動が進められてきました。愛知ネットは、造園・緑化に詳しい愛知からのボランティアの方とともに保護策検討会議へ参加。また、2012年9月に保存のための切り倒し作業が決定するまで、一本松に関する情報収集作業を進めました。

一本松の回復作業に 携われたことは私の大きな財産

災害ボランティア

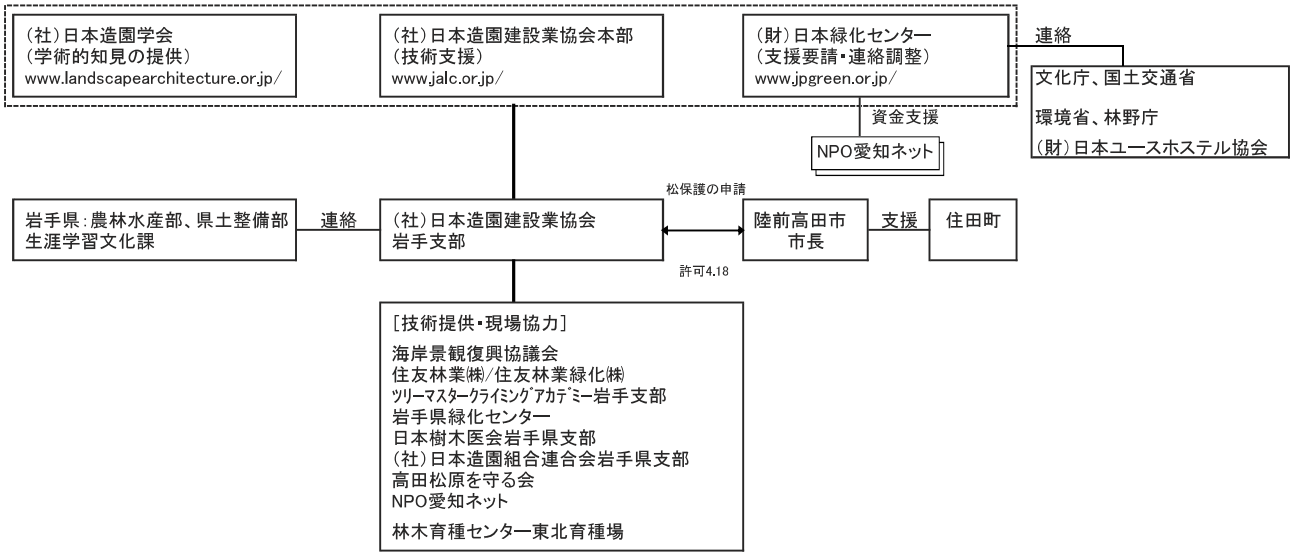
田口　悟さん

2011年5月からの1ヶ月間、陸前高田市の「奇跡の一本松」の復興を支援しました。愛知ネットが資金面での支援をすることとなり、多少の造園業経験がある私がボランティアで行くこととなりました。4月中旬から樹勢回復の対策が進められていて、私は松の根元に海水の浸入を防止する止水パイルを打ち込む工事や、根の近くの地下水面の高さを測定する作業等のお手伝いをしました。

5月、最初に一本松に対面した時はまだ葉の緑が残っていたものの、根元の地面から50cmには塩辛い水があって、樹勢回復はかなり難しいと感じました。そして6月初めの止水パイル打ち工事の時には、葉の緑がなくなり真っ茶色で絶望的に…秋には悲しい宣告がなされてしまいました。

津波に耐えて立ち残ったたった1本の松が立ち枯れという結果になり残念と言うしかありませんが、復興のシンボルとして保存されることになり、この2月には元の場所にモニュメントとして復元される計画と聞いています。全世界で有名になったこの一本松の回復作業に携われたことは、私の大きな財産になりました。

陸前高田市「希望の松」保護体制図



(社)日本造園建設業協会岩手県支部は4月18日、陸前高田市長より「希望の松」保護対策の許可を受ける。
(社)日本造園建設業協会本部は岩手県支部から技術支援要請を受け、日本造園学会に協力を求める。
(財)日本緑化センターは住田町多田町長より協力要請を受ける。
4月22日の調査・緊急対策の段階から、3組織の連携により保護活動を開始。
なお、緑化センター・日造協は高田松原に関係する省庁と連絡を取りながら対策を進めている。